


けやき

令和4年

6月

さいたま市立 大宮北小学校 学校だより

多様性 (違っていいということ)

校長 渡辺 明

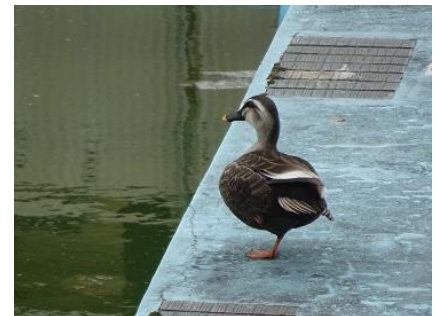
夏の兆しを感じる季節です。校庭のケヤキを揺らす風が爽やかです。

今年は施設改修工事のため、1学期の運動会になりました。応援団が校庭で応援練習をしていると、教室の窓から「応援団頑張れー」という声がかかります。応援団を応援する子どもたちです。その声の温かさに嬉しくなります。各学年の練習の様子からも、子どもたちがどんな活躍を見せてくれるか楽しみです。

さて、話はかわって、20年程前のことです。私は6年生の担任をしていましたが、そのクラスに、ちょっと気になる言葉遣いをする子がいました。その子は、例えば、「昨日の授業で配られた変なプリントを無くしました」とか、「今日の変な給食、すごく美味しかった!」とか、そんな使い方「変な」という言葉をよく口にするのです。そんなに変わったプリントを作ったとも思えなかったのに、そういう口癖なのだとな受け止めていましたが、しばらく付き合っているうちに、その発言のパターンがわかってきました。彼は、「初めて見るもの」や「今まで知らなかったもの」に接したときに、「変な」という表現をするのです。

修学旅行で東照宮を訪れたときも、海外から観光にいらした方と身振り手振りを交えて積極的に交流していましたが、その後で「変な人と話せて楽しかった」と言ったのでドキリとしました。特に悪意があるわけではないのですが、友だちとのコミュニケーションの中で棘のある言葉にならないように、「変な、という言い方は相手を傷つけることもあるかもしれないよ」というような伝え方をした覚えがあります。

時代が変わって、「多様性」という言葉をよく耳にするようになりました。そして時折、その20年前に担任した子のことを思い出します。当たり前のことですが、自分と全く同じ人間は存在しません。クラスで隣に座っている友だちとも違い、きょうだいとも違い、「みんなちがって、みんないい」(金子みすゞ)なのです。そうして様々な違い、多様性を受け入れて、違っていいからこそそのコミュニケーションの楽しさと、そこから生まれる新しい発見で、自分自身の内面も豊かになるというのが理想です。



オフシーズンのプールで暮らすカモ

しかし現実では、違っていいことへの警戒感が生じることもあります。「自分たちと違うもの」を警戒して排斥しようとするのは、人類が集団で暮らし始めた頃の本能のなごりといわれています。本能というのは強いものですから、意識しないところでも言動ににじみ出てきます。また、違っていいことへの恐れや不安は同調圧力を生み出す原因にもなり、さらにはいじめの芽となることも考えられます。

ちょうど1年前の学校だより「子どもたちは優しい気持ちをもっているが、同じ心の内に、ときとして意地悪な気持ちが起こることがある。これは人の心のありようとしては一般的なもので、心の中には善悪の気持ちがあり、その葛藤の場面で正しい行動がとれるかどうか分かれ目である。自分の心にわいてきた意地悪な気持ちに自分自身で気が付いて、それに負けないことが大切」という主旨の文章を載せました。人の心の奥にネガティブな本能の働きがあるとしたら、それに負けない理性や正義を、子どもたちの心に育てていきたいと思えます。

人はみな自分とは違う存在だし、中には苦手だなと思う人と出会うこともあります。そんなとき、「自分と違う人」に対して、「変な人」と切り捨てたり、意地悪をしたりするのはよくないことだと判断して、正しく行動することが大切です。

6月は「いじめ撲滅強化月間」です。多様性を受け入れ、時には葛藤しながら「心豊かにたくましく生きる」ことができる児童の育成に努めていきます。